

織田信長と浄土宗

井川定慶

一、邪魔ものを却く

織田信長は戦国時代のあとをうけて復興の時代に出ている。京都御所を復旧せしめたことは彼れの生涯に於ける優れた業績であつて後世にまでその名を留め正一位を贈られたことは如何に朝廷で高く感謝せられたかを表示し得て充分である。

ところで其の混乱せる日本全体を復興し、改造せんとするに際して先づ残存している邪魔ものを取り除き片付けるといふ役割を仕負い込んだわけである。改造のための破壊もせねばならなかつた。

されば信長の行蹟を通観するに多分に乱暴とも見られるところがあり、また別の見方によると潑刺たる生氣に溢れた積極的な破壊を敢えて断行したとも云えるのである。

信長の此の方針は寺社に対しても同然であつて協力するものには大いに助勢するが、反抗するものに対しては徹底的に齒向つてゐる。殊に社寺が奢侈に流れてゐることを痛く攻めて其の領地を割り裂かんとする一方、己が意に同ずるものには（仏教は余り好まれなかつたらしいが）田地を寄進し堂塔を修覆もしくは建立し金子を与え榮譽を授け

て敬意を払っている。

今『総見記』によるに

近年社人、僧徒等、無用の領地を大分に知行し、法式学問を勤めず、奢侈遊樂を事とし、剩え武士に組してややもすれば兵乱に交はること、国家の蠹害なるを以て其の邪威をおさえんがために神社仏閣の領地を勘査せしむといっている。その第一番の槍玉に揚げられたのが、比叡山延暦寺であつて美濃にある叡山の領地を勘査しめたところ、其れに反撃する比叡山に対しては元龜二年（一五七一）に焼き撃ちをするという重大事件を惹起せしめていたのである。

信長の方針遂行の途上に於いて本願寺教団に対し、その本拠たる大坂石山本願寺を明け渡ししめんことを要求するが、本願寺には浅井、朝倉というアンティ信長の武將が連繫しているし、遠く中国に蟠居する毛利一族とも気脈を通じていたから、信長としては一層本願寺を邪魔ものと考え大坂本願寺を陥れ、そこを根城にして西国経営に進まんとして大いに戦力を傾けたものである。

二、安土宗論

信長は宣教師フロイスからは法華宗の信者だと信ぜられた程に入京のころは法華宗に心をよせ、その寺院に宿泊もし、その所領の安堵もはかっていた。それは法華宗は当時の仏教の中では異端的であり、すこぶる現実的、行動的であつた点が信長の趣味に相通じていたからであろう。このころ信長の側近にあつて使僧の役割を果たしていた朝山日乗が居たが、出雲国で尼子氏に属していた朝山氏の出身であつたが弘治元年（一五五五）天台宗梶井門跡で

出家するに際し、皇居修理のいとなみを勤めたかどを賞せられて、後奈良天皇から朝山日乘上人という上人号を賜ったものであった。随つて必ずしも法華宗ではないが、永禄十一年（一五六八）信長入京後はその上人号に（日乘）相応わしく法華宗として振舞つていた処、忽ち信長に重用されるに至つてゐる。信長による皇居の造営、足利將軍との調停など政治の枢機にも寄与して明智光秀と日乗とは永禄から元龜にかけて、特に義昭將軍と信長とを結ぶ政界の二大実力者にされていたほどである。然し日乗はキリシタンを嫌忌し其の信徒であつた和田惟政を讒してフロイスらの追放を要請したが、信長は惟政の旧功をおもつて無罪となし却て日乗を罰することになつたが朝廷は、皇居復旧についての功勞によつて斡旋せられて死罪は免がれ、天正五年（一五七七）九月に没してゐる。

信長はキリシタンに好意を示し京都四条坊門に所謂南蛮寺を建てさせ、天正八年には安土城下にもキリシタンの会堂・學院を建設してゐる。

信長は仏教を余り好まなかつたのであるが、安土に築城してみると、城下の繁營のために寺院を無視するわけには行かなかつたので、淨敎院、西光寺をはじめ多くの寺院を城下に誘致することになつた。就中、淨敎院は粟太郡金勝寺淨敎坊の応誉明感に帰依していたのでこれを安土の城下に招請し慈恩寺の旧地に比牟礼山多賀興隆寺の弥勒堂を移して本堂となし、応誉をここに住さしめた。かくて淨敎院は近江、伊賀両国の浄土宗寺院八百八寺を末寺として付屬せしめたが、かように信長は僧侶の或る個人に就ては信頼もし大いに後援をも惜しまない場合があり、若し政治的必要があれば更に積極的な処置をも施したものである。

当時山城国久我庄の預所竹内季治という熱心な法華信者がいて、日乘上人同様にキリシタンを大いに嫌ひ、永禄八年五月に松永久秀らによつてキリスト教徒を擁護して来た將軍義輝が殺されると、竹内季治は法華宗徒の先頭に

立つて天主堂を焼き、ビレラを追放した。ところが永祿十二年信長によってビレラは京都復帰を許されると季治らはキリシタンに対する憎悪からキリシタンを許した信長を朝廷に讒奏したため信長は激怒し季治らを捕え、元龜二年（一五七二）九月岐阜へ護送する途中、近江国永原で斬られ家族、所領のすべてを失って五十四歳の生涯を閉じている。

かように信長のキリスト教公認に反対した熱烈なる法華宗徒から犠牲者を出したことが、安土に於ける法華宗徒の厭迫へと進展して行くのである。

天正七年（一五七九）上野国新田の浄土宗浄運寺の靈誉玉念が安土に於て法談していたところ法華宗の建部紹智、大脇伝助の二人が法談に対し不審を言い出した。靈誉は汝ら如き若輩の知るところでない。帰依する師僧を出せと云った、そこで日蓮宗からは頂妙寺日晁（堺の妙国寺開山）、久遠寺日淵、妙願寺大蔵坊、堺妙国寺普伝を安土に下だし、浄土宗からは靈誉玉念と安土西光寺の聖誓貞安の兩人が出て五月二十七日、浄敎院の仏殿で宗論ということ（註）になった。

安土宗論はかかる表面的偶発事件ではなかった。実は京都から法華僧を下向させたのは信長の奉行であった長谷川秀一、堀秀政の催促によってであり、宗論の判者としては南禅寺の長老景秀鉄叟を招請するなど全く計画的なものであった。而かも宗論の始めにあたり、信長は法華僧に対し宗論をするからには負けた場合、京都及び信長の領国中の寺々は破却するという条件を出し、若しそれが迷惑ならこのまま帰るか否かと言って、結局法華僧を宗論に追い込んでしまっている。されば此の事件は初めから純粹な教義の争いというよりも、信長が干渉を加えて遂に法華宗を敗北させる為めのものであった。ところで二十七日辰の刻に雙方とも浄敎院に集った。『安土問答実録』に

よると

法華宗側のもの四人

頂妙寺日珽、常光院日諦、久遠院日淵、法善院某（記録者）

浄土宗側のもの四人

安土西光寺聖譽貞安、上野国最勝寺靈譽玉念、信譽洞庫、京都知恩院之内一心院助念（記録者）

判者四人

南禅寺秀長老（鉄叟景秀）、同判者僧櫻西堂（華溪正稷）、因果居士、法隆寺仙覺房

信長公記では法華宗側に普伝を加えているが、浄敝院文書に見えないし、安土問答実録によるに法華宗側に於て此れを除いたことになっている。即ち

普伝、近日帰伏人、由候間、問答人数不可然候由、日珽被申候

と。普伝は聴聞の爲め、仏前に居たところ奉行衆によつて追出され一般見物人の中に入れられたという。

また法善院というは『安土問答実録』に見える名であるが、信長公記には大蔵坊、浄敝院文書には大増坊とされ「実名ヲシラズ、コノ人、当時ニ逐電セシニヨツテ実名コレヲシラズ」とあり浄蓮寺文書によると、妙顯寺の中のものらしいと。

さて雙方四名の中で主として問答の衝に當つたのは、法華宗側は日珽及び日諦、浄土宗は聖譽貞安であつた。

日珽は天文元年（一五三二）堺に生れ宗論の当時は四十八歳であつた。幼より三井寺、興福寺、叡山等に学び弘治元年（一五五五）に頂妙寺に住し、後ち堺の妙国寺を開創し、また頂妙寺を再興している。日蓮宗に於ける三大

部の講説は此人より始まると称せられる。天正三年（一五七五）に阿波に於て浄土宗の僧と宗論しかけた事もあり生来弁説に勝れ、生涯演説せる數四百八十五座に及ぶといはれている。

日諦は壮年の頃、南都北嶺に遊學し後ち、齋藤道三に知られて尾張の犬山に居たが、道三没落後は京都に上り日珣、日詮等と法華文句を講説して其の名頗る高かつたのである。

日淵は妙満寺の第二十六代で寂光寺を創立して十六本山に列せしめた人である。

これに対し浄土宗の聖誉貞安は後北条氏の一族に生れ小田原大蓮寺堯誉に学び、之に従つて飯沼の弘經寺に移り、師の没後は同寺の見誉に随つて學んでいる。天正年間能登の西光寺に住するも乱を避けて江州に逃る。時に信長が其の智行の勝れたるを聞き蒲生郡中村に寺を建て、西光寺と称せしむ。この住持中に安土宗論が起つたわけである。

この後、京都の浄教寺に寓する時、その徳を慕うて道俗の集るもの夥しく所司代村井貞勝は特に之を尊信し小釈迦と号したという。屢々召されて参内し御前に法を説き天正十五年には二条烏丸に地を賜い大雲院を建つ、今の寺町四条下ル大雲院の元である。慶長六年（一六〇一）阿波に下り高野山の頼慶（此後慶長十三年宗論に判者となつた人）と宗論を行つてゐる。西光寺に「宗法問答」と題するものが現存するが、貞安の問いかかるもので此れに対して頼慶が返答せる「貞安問答」というものが別に存す。安土宗論の時は四十一歳の壮年であつた。

靈誉玉念は伝灯総系譜によると覺蓮社靈誉、上州新田人、嗣法感誉、江州八幡正福寺及摂州住吉哀愍寺開山、天正十四年正月十一日寂とある。

信誉洞庫は同じく総系譜に「想蓮社信誉、勢州人也。投三心住称念、而剃髮、嗣法於禅芳、泉州堺遍照寺開山、天正十四年二月十八日寂」とあり、浄嚴院文書には三河衆とあるが、宗論の頃には三河に居たのであろう。また檀

林鎌倉光明寺誌によると洞庫は信長の使僧であつたとある。法華宗の日珙も同じく堺出身であり乍ら、キリスト教のことで信長の気分を害していると全く対照的存在たることも此の際考慮に入れておきたい。

偕て双方の役者及び判者も決まり各々定め席につく、浄土宗は東の方で左座、法華宗は西の方右座である。判者秀長老は外陣に坐つた。奉行等は兵を率いて其の場を固め多くの人数は皆法華宗の側を取りまいて恰かも籠の中の鳥のようであつたという。安土問答実録に詳細記されているところである。

かくて信長が威力を以て法華宗を圧迫せんとした事は夙にその法論の始まらぬ前から表はれていたのである。

いよいよ法論が始まるのであるが、浄土宗側の貞安が「法華八軸之中、有念仏如何」、

法華の老僧（日諦か）「念仏とは何の念仏ぞ」

貞安少し躊躇して答えず

法華の他の一人、念仏有り

前の老僧は興奮し、赤面して悪い答をしたとて自己の仲間難を懸けた。

因果居士批判、尤も弥陀一家に限らず、仏法修行は何れも仏を念ずる御法なれども、近代は自他宗共に弥陀を唱ふるを念仏者と云うぞ、法華経にも即往安樂世界阿弥陀仏大菩薩と説き給へば、先づ念仏在りと書せるなり。

貞安、念仏の義あらば無間に墮るといふ念仏を法華に説くや

是に於て法華宗閉口したるにより、因果居士は退散せしむべき処なれども、余りにも脆き故に批判を中止したといふ。

日珙、法華の弥陀と浄土の弥陀とは一体か別体か

貞安、弥陀は何くにあるも一体よ

此の時、判者の因果居士としては「是レハ一段ト悪シキ答ヘ様ナレトモ、上様ヨリ御内証アルニ依テ批判セサル也」とのこと

日珣、さらば何ぞ浄土門に法華の弥陀を捨閉闍抛と云て捨つるや、

貞安、捨閉闍抛と云うは念仏を捨てよと云ふに非ず、念仏を修する機の前には念仏の外の余法を捨閉闍抛と云うなり、

因果居士思えらく「是レモ悪キ答話、右ニ申スガ如シ、仏ヲ念スル法ニ漏ルルコトナシ、仏法修行ハ皆念仏ノ法也」

此れに対し法華宗側に於て誰が論難すべきやについて聊か同志間の争があつたという、日淵が口を開いて

「念仏を修する機の前に法華を捨てよという証文は何の経論にあるや、とても如来一代経の中に一字一句もなし、唯閉口せよ」

貞安、これあり、浄土の三部経の中に、善立方便顕示三乗と、其の上に向専念無量寿仏と云々

因果居士「是レハ猶別シテ悪キ答話也、三部経ハ、法花ヨリ三十年前ノ経ナレバ、アシキ也々々々也」されど批判せず、

日珣、無量義経云、以方便力四十余年未顕真実と説てある故、爾前経を捨つるなり、浄土経は方便よ

浄土宗側はグット詰まり貞安と玉念とが口論を始めたので法華宗側は勝鬪をあげて座を立たんとした時、因果居士は直ちに批判を加え法華宗側に向つて

因果居士、法華以前に真実の成仏あるまじきや

日珖、真実の成仏なし

因果居士、真実成仏の経あり、文句有るが知らずや

日珖、何れの経ぞ、何れの文ぞ

因果居士、舊最初の華嚴經に三界唯一心、心外無別法、心仏及衆生、是三無差別とある。然れども此時大乘に機縁無き者を次第に二乗三乗の教を説き給うて法華經にて十方も仏土の中なれば唯一乘法のみ有つて無二亦無三とある。何と心得たぞ、其上華嚴と法華とは同意別名の経ぞ、されば聖徳太子の説法明眼論にのべ給う。南天の祖師朕に示し云く、速かに生死を出でんと欲せば須く根本一乗と云うを憤ふべし、当さに知るべし、一乗の正義は仏心是なり。若し一乗を学せずして生死を出づるといふは、このことわりあることなし、然るに朕は是れ法華の持者なり、当さに知るべし、法華の実義は正に華嚴經に在りと説き給うぞや、聖徳太子の御偽りあらんや、此上にも爾前未顕真実を立てて見よ

貞安はこの助勢を得て日珖に問を懸けたのである。

貞安、四十余年の文を以て爾前の経を捨つるならば方座第四の妙の一字は捨るか捨てざるか、

法華宗の方で「方座第四の妙」ということを聞知せず、誰が考えんかと云ひ争う、

日珖、さては浄土の三部経未顕真実なる事は決定して其の上の御不審か

貞安、それはあとへ戻る。方座第四の妙をば不知歟、

この時織田七兵衛尉信澄が口をはさみ、日珖は尚ほも未顕真実の義をくりかへすのみ、

因果居士、真実の妙より来る義なれば法華の妙と見聞した、止めよ

此れを聞いて日珽は立腹し片批判だ不公平な批判だと怒ったが、

因果居士、汝法華を知らざるや

これより座が混乱し日淵は奉行衆に向い両人共に申つめて候といい、日諦は問答の法により袈裟を取ろうという時、玉念無言にて立ち勝った勝ったと二声叫ぶと同時に、総人数どつと鬨をあげたが、兎に角、浄土宗では自分の方が勝ったと叫び、法華宗側でも亦自分の勝ちだと騒いで結局喧嘩が始まり、曲直の分明せぬままに事が終つたらしい。

かくて遂に日諦の五条袈裟を引き切つて取つたという。日淵は法間に勝ち乍ら袈裟を奪はれては済まぬと玉念の袈裟を取ろうとした処、数千人のもの、日淵にとりつき宙にさしあげ十四五間押しやり浄土側の人の間に入れて手に棒を持つて振るもの数千人もあり、奉行衆は杖を以て雑人共を追払いながら日淵を擲ち捨て、日淵が前の座へ戻ろうとする処を傍より杖を以て面を打つものがあり、血が流れ出るといふ有様であった。その後も混乱があつたが、信長は殿堂の縁に在り秀長老を召し「随分骨折りであつた。今日の法問はよく聴いたであろう」とねぎらうと、長老は「何分にも年老い耳遠く候」と答へると信長は「さうであろう」と云つて秀長老を帰している。

当時信長は其後貞安を呼び「今日の宗論は近來の手柄である」と賞讃している。やがて浄土宗の僧は帰されてい

る。信長は伝助を引き出し「伝助めが徒らによりて此の如き事を仕出来した」とてやがて首を打たれている。また普伝も探し出されて信長から云い渡され遂に堂より引下し芝の上にて頸を刎ねられている。

日諦・日珖・日淵の三僧に対しては誑び証文を書かせられることになるが三人とも容易に応じなかつたことについては、日淵実録、淨嚴院記録に委細を尽しているが結局曼荼羅に起請文を書き血判していることが淨嚴院記録に認められており、信長は村井貞勝に書を与えて宗論の状況を報じ証文を知恩院へ納めしめている。

片や貞安等は五月二十八日に信長より書を賜つて賞せられている。文に云はく（大雲院文書）

今度於_二慈恩寺淨嚴院_一法華宗与宗論之儀申付候処、即遂_二問答_一尤為_レ勝、誠手柄無_二比類_一弥宗旨之筋簡要候也

五月廿八日

信長（朱印）

教蓮社聖著

尚ほ信長公記によると八月二日には貞安へ銀五十枚、淨嚴院長老へ銀三十枚、日野秀長老へ銀十枚、玉念へ銀十枚を賞金として賜わり、その反対の法華宗方よりは九月十六日に金二百枚を納めしめている。信長は此の金を伊丹表・天王寺表・播表・三木表方々に出動して居た諸將士に五枚十枚二十枚三十枚ほどづつ分けて与えている。（信長公記）。

三、信長と法華宗

永祿十一年（一五六八）信長が足利義昭を奉じて上洛し信長の天下統一の事業が始まるのであるがそれより前、細川晴元と本願寺とが戦端を開いた天文元年（一五三二）には、法華宗は細川晴元の味方として大坂の本願寺及び京の一向宗徒を攻めている。

此の頃、法華宗と浄土宗との宗論が各地で行われている。即ち天文十二年には鎌倉に於て宗論し、北条氏康は法

華宗徒を捕え、其の長三人を流罪、其の徒五人を殺している。(統本朝通鑑)また同二十二年甲州に於て浄土、法華の宗論があり信玄の部将原胤胤は法華宗を信じていたので信玄は虎胤を召して浄土宗に転ぜしめようとしたが頑として応ぜず信玄の怒りをかい刑せられんとしたが馬場・内藤の斡旋により漸く小田原へ遁れている。信玄家法には、
浄土宗与ニ日蓮党ニ於テ分国不可有ニ法論ニ若在ニ取持人者師檀共可レ処ニ罪科ニ事
となつている。

当時法華宗は諸大名に対し或者には勢力があつたが、或者には痛く嫌悪されていた。

阿波の三好長治は法華宗を信仰し領内の人民を悉く改宗せしめんとして紛擾を起し、天正四年妙国寺より日珰が行つて宗論をした事がある。この時の宗論は真言宗との争で真言よりの質問に対し法華宗は答弁出来ず、追つて返答しようとし、日珰は国を遁れ出で三好より護衛兵を付けてもらつて堺まで送り届けられている。

ところが日珰の已行記では之と異り阿波に出かけ浄土宗と往復弁じて之に勝つたと記している。兎まれ三好の法華宗信仰の例証である。

また備前の宇喜多直家が法華宗を信じ、他宗を信じたといつて法華の僧徒三百人が、法然上人の御靈蹟たる美作の誕生寺を襲い仏像を毀つている。(作陽誌・以八上人行状記)尚、当時加藤清正の法華宗信仰は有名である。

一方には甚しく嫌悪せられた例もある。殊に公家衆の間には法華宗に反対する者が少くなかつたのである。天正三年朝廷に日蓮義非宗の論者を下さるに至る。それは此の年知恩寺前住友州並に当住友善が東北に巡化し安房に廻つて日蓮宗徒と対論の爲め滞留する由を聞食され、十月二十五日論旨を以て召還され、日蓮宗は宗外なれば一問と雖も本意に非ずと仰せられている。即ち

就三法問之議、前任岷州並当任岷善上人令_レ在国_レ為_レ可_レ遂_二決_二于_レ今_レ滯留云々、太不_レ可_レ然、殊彼日蓮党事、
為_二三宗外之上者雖_二一問_二非_二本意者也、所詮抛_二三万障_二早有_二上洛_二可_レ令_レ参内_二給_二之由、天氣所_レ候也、

仍執達如_レ件

天正三年十月廿五日（日野輝賢）

左中弁（花押）

知 恩 寺

この論旨の写が三寶院文書に存するがそれには「日蓮義非宗之論旨写」と題書されている。勤皇の志の厚かった
信長はかかる皇朝の前後の事情をよく知っていたから初めより法華宗に対する態度には好意が持っていなかった。
尚ほ天下を統一せんとするには天文法乱をなす法華宗の如きは戒心する必要があると考えていたから安土宗論の終
った後ちその事を信忠に報じた書に浄土宗法花宗宗論、彼いたづらものまけ候と法華宗のことを云い送っているこ
とによつても観察できるのである。

信長は安土宗論の前より法華宗に対しては悪感情を抱いていた。日淵の実録に、五月七日問答仰付けられた時に、
若し負けたならば、信長の領國中法華寺院を破却せらるるも苦しからずとの一札を書いて出せとの意味があるから
信長の真意はよく分つている。

即ち安土宗論は、始まらぬ先きから既に勝敗が定まっていたと見るべきである。法華宗は理も非もなく負けさせ
られたのである。因果居士の記録によれば信長は居士に内意を授けて「若し貞安の窮した時は助力せよ」と命じて
あつたらしい。されば上掲の如くとり計つているのである。今一人の判者秀長老の如き八十四歳の老人で耳も遠か
つたがかかる老耄の僧を判者に選出したのも信長の深慮の然らしむるところであつたと考えらる。また貞安の設問

たる「方座第四の妙云々」は或は貞安の苦しまぎれの出鱈目の文句で、判者が彼此の間を弥縫する間に大混乱に陥りそれに紛れて法華の袈裟を奪い取ったようである。

然らば信長が法華宗に何故圧迫を加へたのかについて、いろいろ考えられるが確実なる史料が乏しい。金山抄追加、頂妙寺記録等には信長が堺妙国寺所蔵の「空蟬の茶碗」を所望したが断られた怨みからというが根拠は薄い。次に信長が叡山焼き討ちに際し法華宗が天文法乱に際しての叡山の仕打ちを怨んでいるのを利用して法華宗に対し叡山焼きを助勢せしめんとしたところ、法華宗は承諾しなかったから信長は是より法華宗は自分の云うことを聞かぬものと怨んだとされる。また今一つ考えられることは信長がキリスト教に心をよせるのを強く反撥したことも前述するところである。

かくて安土問答は信長が政策上より法華宗に対して加えた迫害たることは明白である。此の後、秀吉の代に至り天正十三年七月十二日、法華宗は旧の如くに復せられ、京にも帰り、かの佗証文も取返して法華宗に返されている。

四、知恩院に陣を布く

話は年代を遡り足利義昭將軍と信長との関係について述べよう。足利第十三代將軍義輝が松永久秀に弑逆されたあと足利幕府を再興せんとする実弟の義昭は諸方に画策する中、永禄十一年四月になって岐阜城を中心に東海に勢力をはって来た織田信長に御内書を届けたところ、信長自身としては既に正親町天皇から綸旨も受けているから一つのチャンスと考えて義昭を奉じて九月には入洛することになったのである。かくて十月十八日左馬頭足利義昭は征夷大將軍、(足利第十五代)参議左近衛権中將に任じ従四位下に叙せられいよく幕府を再興することになった。

かくて十月二十三日には信長もをてなし能楽を催し其の翌日の御内書には「弥よ国家の安治、偏へに願入るの外他なし云云」と認め宛て名に「御父織田弾正忠殿」と信長を「御父」と称している。また「武勇は天下第一也」とも賞讃している。

翌十二年正月に義昭を本圀寺に囲んだ三好政康らを信長は大雪をおかして上洛出陣し追払ってからは將軍義昭には信長なくしては存立なしと見抜き、乱の平定した正月十四日九ヶ条の事書と七ヶ条の追加からなる「殿中御掟」を制定し義昭に承認の花押を書かせている。茲において義昭の幕府は傀儡政権にすぎずして織田政権が始まっていたのである。

信長は本圀寺の仮住居から名実ともに幕府の再興を示す土木工事を記すのであるが、実は信長自身の權威を示すに外ならなかったのである。かくて四月十四日、二条城の新邸はなり義昭はこれに移った。

続いて同月十六日から内裏の修理にかかり二十一日に朝山日乗、村井貞勝を奉行として一先づ岐阜に帰り、二条の宿は木下藤吉郎秀吉に警固を命じておいた。

京都御所は元龜二年（一五七一）十一月朔に完成せしめて忠誠の実を挙げている。

ところで元龜四年（一五七三）三月になって足利義昭は三井寺の遷慶をして近江に挙兵させ、更に一向門徒を糾合していることを細川藤孝より報告をうけた信長は三月二十九日岐阜より京都に入り、先づ知恩院に陣を布いたのである。

一そして知恩院を根拠にして兵を進め四月二日には下賀茂から嵯峨などに火を放ち、そして二条第を包囲した信長の態度が強かったので義昭は朝廷に和睦の斡旋を請い勅命によって信長と講和することになり、義昭は完全に屈服

し乍らも將軍の命脈を保ち信長は京都を発して岐阜に向っている。

義昭は信長が武田、上杉両氏に心をひかれて東海にひき返したのを機会に自ら將軍としての勢力挽回計画を進め、本願寺との協力、さては遠く毛利輝元へ兵糧米の徴収などを企て七月三日には二条第を出て宇治槇島で拳兵したから信長は怒り急遽入京し来り二条第の留守役を降し、義昭の槇島城を攻めることになった。義昭は当時二歳の子義景を質子として降伏し城を出て河内若江城に向っているが、ここに於て足利將軍は追放され幕府は滅亡して織田信長の政權が確立したと見るべきである。かくて信長の奏請によつて年号も天正と改元されている。

天正二年八月上杉謙信に対する北国征討を終えて十月十三日には岐阜より京都にのぼつた時には公家衆の出迎えをうけ今月二十八日には京・堺の數寄者十七人を招き千利休を茶堂として茶会を催しているが、越えて十一月四日には信長に対し朝廷より大納言兼右大将の御沙汰があつて拝賀となる。これは全く幕府の將軍に相当する待遇である。

ところで足利義昭は宇治槇島を脱出して後ち河内若江城へ向うが遠く中国の毛利輝元に兵を求めたり、大坂石山の本願寺光佐、紀州根来寺の僧徒を味方にとり入れて足利家の勢力の復興を企てるのであるが、是れらの事が信長をして大坂石山本願寺攻めや根来寺焼討ちへと向はしめるのである。

此れに反して知恩院に対しては先きの知恩院布陣による戦勝の結果を六月二日になつて戦勝祈願の謝状となり、九月十二日には知恩院諸堂修覆料の寄進、越えて十月十九日には百貫文の地を寄進するという（以上知恩院文書）厚遇ぶりは本願寺と全く対照的である。

尚ほ天正三年三月二十九日も信長は知恩院に陣を布いている。（信長記・公卿補任）

本願寺や一向一揆に手敵しい信長であったが、全年七月十四日には浄土宗安土浄厳院中興応誉明感が寂するや信長は、かねてより帰依していたというので追善供養のために大いに堂塔を起し寺門の興隆を計っている。

而して天正七年二月十八日に信長は貞安の請をうけて知恩院に寺領百石の加増を行っている。（知恩院文書）そして五月廿七日に信長はその貞安を召して上述の安土宗論を行はしめて日蓮宗徒を痛め乍ら八月二日には浄土宗の貞安には銀若干を賞与するという（信長記・惣且記）。

かように浄土宗、殊に知恩院が信長から数々の厚遇をうけているのは知恩院住持の浩誉聡補が信長の要請を容れて快く陣地を提供したためと見るべきで、あの際、若しも拒絶していたならば恐らく叡山、根来と同じ運命にあつて焼払われていたことであろう。

ところで当時の知恩院住職たる浩誉聡補は万里小路秀房第四男であり、其の師匠で知恩院先代徳誉光然は秀房の舎弟で叔父に当るし、贈皇太后栄子の兄というから公卿家出身で朝廷にゆかりが深い。されば『御湯殿上の日記』によると天正八年九月に参内しているし、翌九年七月廿九日には正親町天皇に御十念を授け是の日香衣を給うている。また九月二日宮中に於て仏典を進講すること三日に及ぶと全日記に記されている。かように浩誉聡補は朝廷と縁故が深い間柄であったから荒廢した京都御所を修復してくれている（永禄十二年四月）信長なれば厚意を持ちこすれ、其の申込みを断わる気持ちになれなかつたのであろう。

魚心あれば水心というか、爾来信長は浄土宗に厚意をよせ親しみを感じて浄土宗關係に力を加え、日蓮宗徒を抑圧する為めに安土に於て宗論を行わしめたようである。

五、清玉と信長

而して天正十年六月二日に織田信長は西国へ兵を進めんとして出動を命じた明智光秀によって宿所の本能寺を攻められ遂に自刃する破目に陥ったのであるが、此の急変を聴いた浄土宗阿弥陀寺の清玉は本能寺に馳せつけて信長に非礼を与えられないように其の首級を秘かに持ち去って自坊に安置している。

清玉は江州坂本時代に信長の恩顧を蒙っていた関係によるものである。京都市寺町通今出川上ル鶴山町阿弥陀寺の寺伝によると蓮台山と号し清玉の開創でもとは近江坂本にあり、信長の帰仰をうけていて元龜元年正親町天皇の勅により堂宇を改修して現山号とした。それが天正十三年現在の地に移転し、後陽成天皇から四脚門を賜っている。境内墓域に信長始め本能寺殉死者の墓があり別に信長像と清玉像とを寺宝として安置している。惟うに信長の首級を最初に埋葬したのは坂本で後に此の地に移葬したものと考えられる。(昭和四六・十二・八)